様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　５ 月 １９ 日現在

機関番号：３３８０３
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３０１９

研究課題名（和文）日常会話コーパスを用いた「課題」に基づく会話の分析：定量・定性の両面から

研究課題名（英文）"Tasks" in Conversation Using Everyday Conversation Corpus: from the Quantitive/Qualitative Point of View

研究代表者
臼田　泰如（Usuda, Yasuyuki）

静岡理工科大学・情報学部・講師

研究者番号：８０７８０５０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，会話の中で参与者がどのような「課題」に対処しながら会話をしているかという観点から会話の分析を行う．従来は「意図」が会話や発話の理解において重要だと考えられてきたが，発話者の意図は特定することができないため，意図を軸にした会話や発話の研究は観念的なものにとどまっている．これに対して本研究では，会話データの上で観察可能な「課題への対処」を軸に据えることで経験的な研究が可能である．またコーパスを用いることにより，従来の定性的な研究ばかりでなく，定量的研究も可能になる．

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の独自性は，日常会話を課題への対処という観点で分析するという点にある．これまで会話における課題という観点は，明示的な目的のもとになされる制度的会話の研究に限られていた．この観点を日常会話に適用するという点は本研究独自の視点である．
本研究の創造的な点は，学術的な関心を満たすとともに，工学的応用のための基礎を提供できる点である．近年，スマートスピーカーや介護ロボットなどへの社会的関心の高まりに合わせて，工学的応用の基礎段階としての日常会話の構造的理解の方法が求められているといえる．本研究はそのような基礎的知見を提供できる．

研究成果の概要（英文）：In this study, we analyze conversations from the perspective of what "issues" the participants are dealing with in their conversations. However, since the speaker's intentions cannot be specified, research on conversation and speech based on intentions has remained conceptual. In this study, on the other hand, empirical research can be conducted by focusing on "coping with issues" that can be observed on conversational data. The use of a corpus enables not only conventional qualitative research, but also quantitative research.

研究分野：会話分析

キーワード：会話　相互行為　会話コーパス　課題　言語

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来，発話行為論や関連性理論をはじめとして，言語学における発話や会話の研究では，発話者の「意図」の理解が重要であると考えられてきた．しかし，発話者の意図というものは直接観察できないため，実際になされた会話を意図の観点から経験的に分析することは困難であるという問題があった．

会話における「課題」という観点からの研究は，例えば診察，裁判，授業など，会話の目的や形式があらかじめ決まっている会話，すなわち制度的会話において進められてきており，会話を連続的な課題の解決過程として分析することによって，状況に付随する課題にシステマチックに対処する過程として記述することに成功してきている．これに対して，親しい友人との雑談のような日常会話においては，会話の目的は必ずしも明確ではないため，課題という観点からの日常会話の分析はなされてきていない．

しかし，制度的会話における課題を一段階抽象化して，課題という観点を日常会話にも適用することで，それぞれの課題において参与者が行なっている対処を明らかにすることによって，日常会話も構造的な過程として捉えることができるようになると考えらえる．申請者は 2016 年から国立国語研究所において『日本語日常会話コーパス(CEJC)』の構築に携わる中で，従来不定形なものとして捉えられてきた日常会話に，経験的かつ構造的な研究の視座を与えることができるという考えに至った．そこで本研究では，日常会話の中で参与者が直面する「課題」にどのように対処しているのかという観点からの分析を行う．本研究における課題とは，必要な情報を得ること(「情報の取得」)や，対する相手の注意を得ること(「注意の確立」)など，会話や会話と並行して行われる活動を遂行するために参与者が解決している問題を指す．

さらに，これまで課題とその対処という観点からの研究は，ほとんどが定性的な方法でなされている．しかし CEJC が公開されたことで，転記テキストだけでなく品詞や韻律といった各種情報を伴った日常会話のデータが利用可能になってきており，定量的研究の基盤が整ってきている．

２．研究の目的

本研究では，会話の中で参与者がどのような「課題」に対処しながら会話をしているかという観点から会話の分析を行う．本研究における課題とは，必要な情報を得る(「情報の取得」)ことや，相手の注意を得る(「注意の確立」)ことなど，会話や会話と並行して行われる活動を遂行するために参与者が解決している問題を指す．

３．研究の方法

本研究では国立国語研究所で構築した『日常会話コーパス(CEJC)』を用いる．CEJC には人々の実際の生活環境における日常会話の音声・映像データとその転記テキストに加えて，形態論情報(品詞など)，韻律情報，談話行為タグなどの各種アノテーションがすでに付与されている．研究計画の概略としては，CEJC の転記テキストに課題ラベルの付与を行い，課題ラベルを利用して，課題への対処がどのような発話の連鎖によってなされているか，またそれらの発話はどのような語彙や品詞によって組み立てられているかの分析を行う．

４．研究成果

本研究の成果は『国立国語研究所論集』に掲載した 2 編の論文のほか，International Pragmatics Conference，Oriental COCOSDA などの国際学会，言語・音声理解と対話研究会などの国内学会で発表された．

主たる成果のひとつは『国立国語研究所論集』掲載論文の「態度をほのめかす例示――日本語引用表現「みたいな」の分析――」である．本研究では，日本語の会話において，なんらかの発話を引用し，「みたいな」が発話末に置かれるような発話を分析した．従来，このタイプの発話についてはいくつかの研究がなされてきているが，多くの場合自然会話のデータは用いられておらず，実際の会話における参与者が何をするためにこうした発話を用いるのかということは十分には明らかになってきていない．そのため本研究では，国立国語研究所で現在構築中の『日本語日常会話コーパス』を利用し，会話分析の手法によって，上記のタイプの発話を分析した．分析の結果，以下のことがわかった．自分の発話に続けて発話する場合，語った事態や出来事に関して自分がどのような態度をとっているかが表出される．他の人の発話に続けて発話する場

合，その参与者が語った事態や出来事に関する聴き手の理解を例証する．これらにより，なんらかの語られた事態や出来事に，可能な反応の形で続きを付け加えることで，事態や出来事についての態度を提示する方法になっており，態度を明示的に記述することなく言及することで，語り手と聞き手が出来事や事態からそれぞれ同じ態度へと至ることが目指されていると考えられる．

もう一点の主たる成果は，『国立国語研究所論集』掲載論文の「不正確な引用――日本語日常会話における複合助詞「とか」による語りの構造化――」である．本研究は日常会話において，参与者が過去に経験した出来事を時系列的に語る「物語」の語りにおける複合助詞の「とか」の分析を行う。「とか」は「A とか B とか」の形で，類似のものを並列的に列挙する用法があるほか，会話などにおいては断定・明言を避ける対人配慮的な用法があるとされてきた。一方，近年ではそうではなく，評価の際立ったものの集合の中から一例を取り出して提示する「卓立的例示」と呼ばれる用法が見られることが指摘されてきている。本研究では，この「卓立的例示」に類する用法のうち，物語の語りの中に生じ，引用を導くマーカーとして使用されている例を『日本語日常会話コーパス』を用いて収集した。本研究で明らかにしたのは以下のことである。物語の語りにおける，引用を導く「とか」も「卓立的例示」の一種と見なせる用法が多く見られる。その上で，物語における出来事の推移に沿って，時系列的に先行するものごとに対して，後続することがらを際立たせるという構造の中に生じることがわかった。またそうした働きは，「とか」のもつ不正確さの含意の作用であることが示唆された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 臼田泰如	４．巻 20
２．論文標題 態度をほのめかす例示 ： 日本語引用表現「みたいな」の分析	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 149-169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00003097	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 Hanae Koiso, Haruka Amatani, Yasuharu Den, Yuriko Iseki, Yuichi Ishimoto, Wakako Kashino, Yoshiko Kawabata, Ken’ya Nishikawa, Yayoi Tanaka, Yasuyuki Usuda, Yuka Watanabe
２．発表標題 Design and Evaluation of the Corpus of Everyday Japanese Conversation
３．学会等名 13th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC2022)（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 臼田泰如
２．発表標題 日常会話における「状況づけられた語り」
３．学会等名 言語資源ワークショップ2022（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 臼田泰如
２．発表標題 語りを構造化する引用：日本語日常会話における引用標識「とか」の 分析
３．学会等名 日本認知科学会第38回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 臼田泰如
２．発表標題 日本語日常会話における非並列用法の「とか」による引用の分析
３．学会等名 言語資源活用ワークショップ
４．発表年 2021年

１．発表者名 臼田泰如
２．発表標題 Complaintの語りをaffiliativeに行う方法としてのlaughable episodes
３．学会等名 第91回 言語・音声理解と対話処理研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 臼田泰如
２．発表標題 日本語会話における「擬似コードスイッチング」の分析
３．学会等名 日本認知科学会第37回大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Yasuyuki USUDA
２．発表標題 Japanese Quotation Marker ``tte'' in Conversation using Everyday Conversation Corpus.
３．学会等名 Oriental COCOSDA 2020（国際学会）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関